

平成二十八年八月十日発行
皇學館論叢第四十九卷第四号
抜刷

紹介

遠藤慶太氏著

『六国史』—日本書紀に始まる古代の「正史」

多田圭介

遠藤慶太氏著

『六国史——日本書紀に始まる古代の「正史」』

多田圭介

はじめに

本書は、表題通り「六国史」に関して、一般読者向けにまとめられたものである。その内容は『日本書紀』から『日本三代実録』までの各国史が、①どのようにに編纂され、②どのような内容が記され、③どのような特徴を持ち、④どのようにに継がれてきたか、といった点に焦点が絞られて記されている。いまま少し具体的に言えば、①は編纂の経緯や撰者との関係、②は記事とその時代背景、③は構成や他の国史との比較、④は完成後から現代までの用いられ方や書写や出版の過程が端的に叙述され

ている。その記述の端々には、これまでの六国史研究の成果と、六国史研究の第一人者たる著者の卓見が散りばめられている。また、上記の内容から六国史だけでなく、日本古代史や日本史学史の基礎を学べる書ともなっている。以下、各章の内容を抜粋し、紹介していこう。

本書の主な内容

序章 六国史とは何か

本章では六国史に関する基礎的事項を概括する。それも基礎中の基礎「六国史」という語句の訓み方からである。そこから

体裁、編纂、撰者、内容と叙述されていく。「六国史」という言葉は聞いたことあれど、実際のところ『日本書紀』以外の書物にはあまり馴染みがない、というのが一般読者の多数意見ではなからうか。著者はその点を考慮して明快に且つ簡潔に述べてくれている。また、中国史書との関係にも言及されているところに、東アジア史の視点から六国史を検討されてきた著者の見識が伺える。

第1章 日本最初の歴史書——『日本書紀』

本章の主題は、歴史書（記録）としての『日本書紀』である。『日本書紀』といえは『古事記』とともに「記紀」と総称され、一般の読者にとっては神話や伝承が掲載された書物としてのイメージが強いのではなからうか。それを遠藤氏は史料をもとに編纂された書物である、ということを述べる。

第1節「全三〇巻の構成と記述」において、『日本書紀』全三十巻の大略を述べる。その中で『日本書紀』が描く「大化改新」や「壬申の乱」等を取り上げ、伝承の部分と記録の部分が同居していることに注目させる。

第2節「伝承と記録のあいだ」では、『日本書紀』編纂者の視点から、「天皇長寿の原因」（例えば神武天皇崩御の年齢が一二七歳であること）や神功皇后の実在性、「壬申の乱」の記

述に迫っていく。これらは戦後、『日本書紀』が作為的な書物であることの根拠ともなった記事でもある。遠藤氏はこれらを一括りにせず、一つ一つの記事を丁寧に検討された上であくまで客観的な結論を出しておられる。

第3節「素材」では、主に僧侶の記録、遣唐使の記録、百済史書を取り上げる。その中で、『日本書紀』が百済史書に依拠したがためにおきた朝鮮半島事情の偏りを指摘する。

このように、「伝承」の面が強調される『日本書紀』に関して、当時の情勢・編纂者の事情と照らし合わせながら、あくまで編纂された書物としての一面を強調するのが本章である。

第2章 天皇の歴史への執着——『続日本紀』『日本後紀』

奈良時代は『続日本紀』以外にも史料が豊富に残されている。その主なものが『類聚三代格』であり正倉院文書であり木簡史料である。第1節「奈良時代への入り口——『続日本紀』」では『続日本紀』の基本的な構成とともに、素材となった史料や対比・裏付けができる資料を紹介する。そして、『続日本紀』撰者がどのように素材史料を凝縮（要約）し、取捨選択していったのかを述べる。

第2節「英主、桓武天皇の苦悩——特異な成立」では、『続日本紀』編纂の際の特徴である、「圧縮作業」と「今皇帝の同時

代史」の二点を中心に、それによって起きた弊害を述べる。つまり、当初三〇巻あった前半部を二〇巻に圧縮したことが原因で、長屋王の変の記述に矛盾が起きている。また、「今皇帝の同時代史」、すなわち「自分の評価を歴史書のなかに定めさせた」ことが原因で所謂「藤原種継暗殺事件」に関する早良親王に関する記述が破却されている。これらの編纂の裏側は、一般読者してみれば馴染みはないが、興味深い話題なのではなからうか。また、『続日本紀』を読む者として、そして用いて研究する者としては、これらの編纂過程を押さえながら史料を読み解く必要がある。

第3節「太上天皇への忠臣評——『日本後紀』」では、まず『日本後紀』最大の特徴である全四〇巻のうち一〇巻のみしか残っていない現状を取り上げ、これまで復元のためになされてきた努力を紹介する。『日本後紀』そのものとしては、三次にわたる編纂事業について述べた後、一貫して編纂事業に携わった藤原緒嗣に着目する。

従来、『日本後紀』の特徴として「人物批評の辛辣さ」が挙げられてきた。そしてそれは一貫して編纂事業に携わった藤原緒嗣の個性が反映されたものであるというのが通説とされてきた。その点でいえば、遠藤氏の、

そもそも六国史について各史書の特徴を説明するために撰

者の個性に帰す方法そのものが有効なのだろうか。勅撰史書は決して個人の「作品」ではない。天皇の命令を受けて編纂された共同の著作なのだ。

との指摘には、目の覚めるような思いがした。あくまで国家が編纂した「正史」であるとの視点は忘れてはならない。

第3章 成熟する平安の宮廷——『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』

第3章では『続日本後紀』以降の三つの国史をまとめて取り上げる。

第1節「秘薬を飲む天皇の世——『続日本後紀』」では、『続日本後紀』が初の天皇一代の国史であることに触れ、そこから医薬に傾倒した仁明天皇の特徴、編纂の総裁であったであろう藤原良房・良相の関係、そして応天門の変による撰者の変化、良房とともに唯一最後まで編纂に携わった春澄善繩について述べる。『続日本後紀』に関しては、史料的な特徴というよりは、撰者から見た編纂の経緯を紹介している。

第2節「摂関政治への傾斜——『日本文徳天皇実録』」では、『日本文徳天皇実録』の記述から読み取れる当時の政治状況や天皇の体調を基に、なぜ摂関政治が誕生することになったのか、ということ合理的に述べている。併せて、文徳天皇が内

裏に入らなかつたという記事から、他の史料を用いて文徳天皇と藤原良房との関係を述べ、六国史の読み深め方を述べる。あくまで六国史は記録である。他史料を用いることによって、その記録を読み深めることができることを示している。

第3節「国史の到達点―『日本三代実録』では、本朝最後の正史となつた『日本三代実録』に関して、その完成度の高さとともに、正史の用いられ方の変化を説いていく。その例として、『類聚国史』が編纂されたこと、用いられる史料が国史の記事から各官人家に伝わる日記へと変化していったことを挙げておられる。

第4章 国史を継ぐもの―中世、近世、近代のなかで

本章では、『日本三代実録』の後、どのように国史が用いられ、読まれ、継がれてきたかを述べる。

第1節「六国史後―「私撰国史」、日記による代替」では、『日本三代実録』のちに『新国史』が編纂され、その後国史を継ぐようとする意識が、「私撰国史」・「日記」に分かれてきたことを述べる。前章の最後の部分でも触れられていたが、平安時代も中期から後期になると、各家系で官人としての分野が定まってくる。そして「前例（先例）主義」とも呼ばれ、儀式や行事の際には必ず先例を調べる時代が訪れる。そんな時勢にあつて

は、幅広く網羅した書物よりも、分野毎に特化した書物の方が多用されることとなつたのであろう。ただ、国史を継ぐ意識があつたことは見逃してはならない。その点において、『源氏物語』や『榮花物語』が「仮名の日本紀」と呼ばれたことは非常に興味深い。

第2節「卜部氏―いかに書き伝えられてきたか」では、卜部平野流、卜部吉田流、三条西家と六国史がどのように書き伝えられてきたかが詳細に述べられる。

第3節「出版文化による隆盛・江戸期から太平洋戦争まで」では、徳川家康による六国史書写の命令、十七世紀後半には『日本後紀』を除く六国史が入手可能となつたこと、徳川光圀による『日本後紀』の探索と『大日本史』の編纂、塙保己一による『日本後紀』の出版と続く。現在我々は、当たり前のように六国史を手にすることができる。けれども、八世紀の書物（編纂物）が、現代にまでほぼそのままの形で受け継がれているというのは、世界史上から見ても稀なことである。そこには、三条西家や塙保己一など先人たちの苦勞があつたことを忘れてはならない。本章の第2節・3節では改めてそのことを感じさせられた。

そして近代歴史学の六国史継承へと筆が進む中で、「本来であれば、六国史の本文校訂も国家的事業として取り組むべき性

質である。」との指摘には感銘を受けた。編纂過程や書写過程の歴史を顧みれば、現在六国史の研究や校訂作業が民間の研究者で行われ、深化していつていることの方が異質であることに気づかされた。

総評

さて、本書を読み進めていく中で、改めて感じたことがある。それは、『日本書紀』や『続日本紀』に関しては史料そのものの解説が中心であるが、『日本後紀』以下に関しては史料から読み取れる事項の解説が記述の中心であることである。これは決して著者の気まぐれではない。この記述の特徴には、大きく分けて二つの著者による読者に対する配慮が含まれているように感じた。

一点目は、現在の研究動向の反映である。『日本書紀』はいうまでもないが、以下五国史のうちで最も研究が進んでいるといわれるのが『続日本紀』である。それは、新日本古典文学大系本が刊行されたり、皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所による『續日本紀史料』が完成したりしていることから明らかである。また、『日本後紀』に関しても集英社の『訳注日本史料 日本後紀』が刊行されている。その点で、『続日本

後紀』以降の国史に関しては、まだまだこれからといった感が否めない。これは専門の研究者に課せられた課題であろう。

二点目は、一般読者が興味を抱き易い事柄を取り上げた、という点である。『日本後紀』以下の国史に関しても、史料そのものに特徴がないわけではない。けれども、『日本書紀』のように伝承か記録かの疑義や『続日本紀』編纂にみられる史料の「破却」「圧縮」などの方が、一般の読者にとっては興味が惹かれる内容なのではなからうか。これらの「破却」や「圧縮」などはある意味、史料の、そして編纂の不完全さがもたらしたものである。皮肉にも、そのような不完全さが一般の読者の興味を惹くのである。後半部に、「史料」そのものではなく、「史料」から見える時代の解説が中心となったことは、時代が下るにつれ、国史編纂の作業が成熟してきたということの表れでもある。

以上のことから言えば、著者は六国史に関して、押さえておかなければならない基本的事項を示しつつ尚且つ一般の読者の興味を惹く内容を選び、執筆に励まれたものと思われる。苦心されたことと察するが、現在では六国史研究の第一線におられる著者ならではの内容である。「あとがき」で本人も書いておられるが、古代史を専門とする研究者で、「六国史」といえば、まず思いつのが坂本太郎氏の名著「六国史」であろう。著者は控えめに「分をわきまえていない」との声が出るのは承知して

いる」と述べておられるが、そんなことはない。本書も決して
負けず劣らずの良書である。今後は、本書が日本古代史や六国
史に興味を持つ一般の読者ならびに今後日本古代史を学ぼうと
する学生にとっては必読の書となっていくことであろう。

（中公新書、平成二十八年二月刊。）

新書判二六六頁、本体八二〇円）

（ただ けいすけ・学法津田学園高等学校教諭）

遠藤慶太氏著 『六国史―日本書紀に始まる古代の「正史」』（多田）